## AJEQ NEWSLETTER

## 2012年夏の号



©日本ケベック学会 Association japonaise des études québécoises

第3巻 第2号 2012年7月23日発行

#### 〈2012年夏の号の内容〉

- 1 会長の国際学会参加の報告 (小畑)
- 2 2012年4月~7月のAJEQ-セミナー、研究会、出版など
- 3 ジョスリーヌ・モンプティ、立教大学で公演(安田)
- 4 4月新刊の翻訳書『マルチナショナリズム』紹介(丹羽)

## 小畑会長、国際学会への参加続投

小畑精和会長が、6月10日~17日までギリシャで開催された国際フランコフォニー学会(CIEF)大会と、7月2日~6日にケベック市で開かれた第一回世界フランス語フォーラムに、日本の学術界代表として参加してくださいました。会長によるその時の報告をお伝えします。

#### 国際フランコフォニー学会参加報告

6月10日~17日にギリシア第二の都市、マケドニアの中心地テッサロニキで開催された国際フランコフォニー学会(CIEF)第26回大会で、15日のセッションの発表・司会を務めてきました。

セッションのテーマは「ケベック文学における、戦争、テロ、暴力(Représentation de la guerre, du terrorisme et de la violence dans la littérature québécoise)」で、まず、コンコルディア大学のリュシー・ルカンLucie LEQUIN教授が「『束の間の幸福』と『九日間の憎しみ』における戦争」と題した興味深い発表をなさいました。次に、モンレアル大学のジル・デュピュイGilles Dupuis教授が「ルイ・アムランの『オオヤマネコ座』における十月危機と戦時措置法」と題し

た刺激的な発表を行われました。最後に小畑がアキ・シマザキの『秘密の重み』に見られる暴力と 戦争について発表しました。

「やり直し総選挙」直前でしたが、「財政危機」に発する混乱を尻目に、テルマイコス湾沿いに立ち並ぶカフェで夕陽を眺めながら「フラッペ」と呼ばれる泡立てたコーヒーを飲む人々を見ていると、様々な人々が行き交ってきたマケドニアの長い歴史が思い起こされました。緊縮財政は嫌だけど、ユーロ圏から取り残されるのはもっと困る、といっていたタクシーの運転手の言葉が印象的でした。

詳細は学会誌第4号をご一読ください。

#### 世界フランス語フォーラム参加の報告

ケベック市で開催された第一回世界フランス語フォーラム(Forum mondial de la langue française)に7月2日、3日の二日間参加してきました。この大会は二年前にモントルーで開かれた第13回フランコフォニー・サミットで決定された、OIF(フランコフォニー国際機構)主催のフォーラムです。グローバリゼーションの時代に、特定の言語・文化に限定されることなく、複数性を重んじる視点から、フランス語の現状・可



能性を報告し、その将来を 議論しあうのがフォーラム の目的です。

1500人以上の参加者・ 300人以上の発表者という 大きなフォーラムで、日本

からは、三浦信孝中央大学教授(日本フランス語教育学会前会長)が基調講演、私が分科会で報告を行いました。また、アホメド・アライタ・アリ駐日ジブチ大使、昨年の日仏会館フランス語コンクール優秀賞の中央大学院生・菊池大輔君と、AJEQ奨学金受給者の明治大学院生・仲村愛会員が招待参加しました。

開会式では、シャレ・ケベック州首相はもちろん、ハーパー連邦首相、ディウーフOIF事務局長らが挨拶し、メディアでも大きく報道されました。また、アフリカ諸国や世界各地から将来を担う多くの若者が集まり、開会式でも各地域を代表する青年たちが堂々と演説をしていたのが印

象的でした。開会式で、ハーパー首相が一部分だけ英語で話し始めると、会場から、「On n'a pas besoin de Vous!」と叫ぶものがいて、ガードマンに取り押さえられホール外に出されました。会場となったケベック会議センター前の道路には「愛国者」のデモ隊が押し寄せ、フランス語が十分に擁護されていないとプラカードを掲げ、集会を開いていました。大会の分科会でもフランス語の称揚だけでなく、危機的な状況の報告もありました。フランス語を巡る情勢は複雑です。

ともあれ、コンサートやピクニックなどの催しも多数開かれ、若者たちの交流の場にもなり、有意義なフォーラムになっていました。日本ではまだ休みに入っていないので、発表の翌日7月4日(水)に私はケベックを発ちました。6日(金)の会期末までいられなかったのが、非常に残念でした。(小畑精和)

(1面トップ右の写真は、三浦教授、アライタ大使と、また文中の写真は、シャレ州首相と。)

#### 2012年4月~7月のAJEQ

AJEOの新学期は、まず小倉和子副 会長が主催し、AJEQが共催した、立 教大学公開セミナーから始まりまし た。小倉副会長の招聘で、ケベック 州シェルブルックから訪日くださっ たナタリー・ワテーヌ教授とフラン ソワ・エベール・モントリオール大 学名誉教授による、スリリングなケ ベック現代文学史でした。4月23日は ワテーヌ教授による「ケベックの 詩ーその始まりから現在まで」とい う講演、そして28日にはワテーヌ教 授のアンヌ・エベール論とフランソ ワ・エベール教授による「到着の謎 -1980年以降のケベック移民作家」 論の発表。しかし、最初から最後ま で八面六臂の活躍を見せてくださっ たのは、小倉先生でしたね。(セミ ナーの様子は一面トップ左二枚の写 真をご覧ください。)

一方、7月7日、早稲田大学でもたれたAJEO主催の研究会では、矢頭典

枝理事・事務局長が最初に言語政策 の近年のプログラムについて説明を くださり、東京外国語大学博士課程 在学中の近藤野里会員による「ケ ベック・フランス語の発音の特徴」 という発表がありました。この言語 政策のテーマは、10月6日のAJEQ大 会シンポジウムで予定されている テーマ「フランス語憲章35周年」を 先駆けたものです。

#### その他ケベック関係の講演会

曽田修司会員からの情報によれば、国際演劇協会(ITI/UNESCO日本センター)と世田谷パブリックシアターは、「世界の同時代演劇」というレクチャーシリーズの第二弾として、6月26日と7月4日に世田谷パブリックシアターで、ケベック演劇についての講演会を行いました。早稲田大学の藤井慎太郎教授による「ケベック舞台芸術の現在一演劇、ダンス、サーカス」、そして「ケベック

舞台芸術―ナショナリズムと文化政 策」という魅力的なテーマの講演会 でした。

安田敬会員からの情報によると、 今年1月から半年間、東京レジデンス アーティストとして日本に滞在する ケベックの代表的ダンサーの一人、 ジョスリーヌ・モンプティ氏が、6月 16日に立教大学心理芸術人文学研究 所の招きを受けて、一般公開ダンス 上演を行いました。(下記参照)

矢頭典枝会員が、麗澤大学で開催された日本言語政策学会の全国大会で、6月9日、現在京都大学に招聘滞日されているケベック大学モンレアル校のクロード・ジェルマン教授が「カナダにおける英仏語以外の外国語教育の動向」と題した基調講演を行ったことを報告してくださいました。教授の講演スケジュールはこちらへ。http://www.gouv.qc.ca/portail/quebec/international/japon/

#### 会員の論考、仕事、栄誉

まず、去年秋に来日がかなったダニー・ラフェリエール氏の立教大学公開講演会の記録を、小倉和子副会長が、『立教大学フランス文学』誌(第41号、2012年3月刊行)に掲載されました。タイトルは"Ecrire entre Haïti et le Québec (Conférence-entretien de Dany Laferrière, le 3 octobre 2011, Université Rikkyo)"、フランス語の記録です。

それから、小畑精和会長が、自ら編集委員を勤められてきた雑誌『現代の理論』2012年春号(特集「日本はどこへ?希望はどこに」、明石書店発行)に、「多文化共生論の幻想」と題した現代世界文化論についての論を寄稿されました。詳細はこちらへ。http://www.akashi.co.jp/book/b101896.html

さらに、立花英裕副会長、小松祐子理事、岡見さえ会員が、日仏経済交流会が編纂した『フランス人の流儀―日本人ビジネスパーソンが見てきた人と文化』(大修館書店刊)に、それぞれ「『複言語主義的教養』としてのフランス語」、「文化の国フランスの流儀」、「舞踏を通した日仏文化交流」という題の論考を寄稿しました。詳細はこちらへ。http://www.amazon.co.jp/dp/4469250813

また、フランス語圏の文化政策という視点をケベック研究の一つの柱とするAJEQにとっては、真田桂子理事が6月23日に阪南大学で開催された公開講演会「ワインと料理で世界はまわる―フランスの饗宴外交と国際政治」は非常に興味深いイベントだったと言えるでしょう。真田理事は、今回の講演会に、『エリゼ宮の食卓』で名高い毎日新聞社外信部記者、およびフランス、レジオンドヌール勲章受勲者の西川恵氏を講師に招きました。

最後に、カリタス女子中学・高校で教鞭を執ってこられた山崎吉朗会員が、その優れて一貫した教育者としての業績により、フランス外務省より学術栄誉・教育功労賞(chevalier des palmes académiques)を授与されました。カリタスはケベックの修道会に教育の基盤を置く格式高いミッション校の一つとして日本でもよく知られています。受勲について、山崎会員はこのように述べられました。「シスターたちが遠いケベックから極東の地に降り立って創立した学校の教育に対し、フランス政府が高く評価してくださったことを、誇りに思います。」(AJEQブログ資料集より一http://ajeq.blog.so-net.ne.jp/)

#### ジョスリーヌ・モンプティ、立教大学で公演(安田)



カナダ・ケベック州の代表 的ダンサーのひとりである ジョスリーヌ・モンプティ (Jocelyne Montpetit) さん のダンス公演『病める舞 姫』および対話形式の講演 会が、6月16日土曜日、立 教大学新座キャンパスで上 演されました。(写真:安 田 敬)





# 新刊紹介・・・ 『マルチナショナリズム―ケベックとカナダ・連邦制・シティズンシップ』(著・ガニョン/イアコヴィーノ、邦訳・丹羽卓/古地順一郎/柳原克行、監修・丹羽 卓、彩流社、2012年)

ケベック社会学のみならず、グローバル 時代の多民族国家論に関心のある人々に とって白眉の文献、Alain G. Gagnon & Raffaele Iacovino, Federalism, Citizenship and Quebec: Debating Multinationalism (Toronto, Univ. of Toronto Press, 2007)の 邦訳が、今年の3月末日、彩流社から刊 行されました。翻訳者の一人であり、監 修をっとめられた丹羽卓理事が、AJEQ 会員のために、詳しいご紹介の労をとっ てくださいました。

カナダという連邦国家を論じる場 合、日本での研究の大多数は英語文 献に依存し、英語系の研究者の目を 通して見ることになります。その場 合、往々にして、ケベックは「わが ままで厄介な存在」と映ります。し かし、ケベック以外のカナダにとっ てはそうでも、ケベックにはケベッ クの言い分があります。それを日本 語文献で知る機会は極めて少ない状 況で、本書には「ケベック問題」に ついてケベック側の視点から概観で きるという価値があります。しか し、本書の主眼はそこではなく、カ ナダ連邦制を再検討し、そして現在 のカナダーケベック関係の閉塞を打 破すべくひとつの新しい連邦観(マ ルチナショナル連邦制)を提唱して いる点です。

その前提にはケベックを一つのネイションとみなす考え方があります。1763年に英領になって以降、英語系カナダ人の支配のもとで「自分達は何ものか」と絶えず問い続けてきた民の末裔として、特にフランス系ケベコワはネイションという問題には絶えず向き合わなければなりませんでした。そのため、ケベックにはネイションに関する長い豊かな議論の蓄積があります。近代国民国家

では、一つの国家には一つのネイ ションしかいないということになっ ています。そうだとすれば、カナダ にはカナダ人というネイションしか ないことになり、ケベコワというネ イションなどあり得ないことになり ます。すると、現実に英語系カナダ 人とは異なる言語・文化・歴史を 持った自分達は何ものなのか一この 問いはケベック自身に向けられると 同時にケベック以外のカナダにも突 き付けられることになります。それ こそが「ケベック問題」の本質と言 えるかもしれません。そのうえ今、 ケベコワはフランス系だけではな い。多様な文化的背景を持つ人々を どのように一つのネイションとして まとめあげていくのか。その基本理 念こそがインターカルチュラリズム ですが、それについても論じられて います。



本書は専門書ですから平易な書物ではありません。しかし、論旨は明快で説明も行き届いています。そして、カナダの専門家以外にも理解しやすいよう出来る限り詳細な訳注を付けました。

それではケベックはどのようなネイションなのか―そこに関心が向いたなら、2007年に同じ彩流社から翻訳出版したジェラール・ブシャール著『ケベックの生成と「新世

界」一ネイションとアイデンティ ティを巡る比較史』(原書は2000年 刊行)をお読みいただきたいと思い ます。本学会会員の竹中豊氏と私が 共同監修し、同会員立花英裕氏と古 地順一郎氏と私、他2名が翻訳をし ています。ケベックの歴史を南米諸 国、オーストラリア、ニュージーラ ンド、アメリカ合衆国、カナダの歴 史と比較することで、ケベックの独 自性と新世界としての共通性を明ら かにするという大胆な試みを成し遂 げた大著です。英訳以前に日本語訳 が出版され、カナダの歴史学の泰斗 であるラムゼイ・クックが高く評価 する以前に日本で読まれたという面 白いエピソードもあります。特に第 3章は詳しいケベックの歴史を知る のに非常に有益です。ケベックをど の視点から研究するにせよ、その歴 史を知るのは必須です。他方、「新 世界」の国々を比較することで新し く見えてくることもたくさんありま す。その点では、ケベック研究者だ けでなく、幅広い読者に是非読んで いただきたい書物です。

私はこの10年間、2冊の翻訳と訳注に多大な時間と労力を注いできました。それは大変な仕事でしたが、自分にとって非常に勉強になり、価値のあることだったと思っています。この2冊を翻訳出版したことがケベック研究、カナダ研究、そしてで、カナダの重献に繋がれば、私にとってさらに広く政治学や歴史学などの研究への貢献に繋がれば、私にとって大きな喜びです。なお、『ケベックの生成と「新世界」』は第17回カナダ首相出版賞審査員特別賞を、『マルチナショナリズム』は第22回カナダ出版賞を受賞しました。

(丹羽 卓)

## ニュースレターでは、会員からの特別寄稿文を 募集しています

年3回発行されるAJEQニュースレターでは、随時会員の皆様からの寄稿文を募集しています。皆様がお持ちの貴重なケベックに関する最新情報を、他の会員の方にもお届けしましょう。今回の春号では、ケベックのダンサー、ジョスリーヌ・モンプティの記念すべき日本初公演の写真をを安田理事からいただいたほか、新刊学術書について翻訳者の丹羽先生からご紹介をいただきました。皆様も是非、ケベック研究者にとって面白いと思われたことを記事にして、ニュースレター担当の方へお送りくださいませ。(加納)

#### 編集後記

そろそろ夏休みですね。夏休みが終わったら、すぐに全国大会の準備が始まります。2012年AJEQ全国大会は、10月6日に早稲田大学で開催される予定です。発足してすでに4年目、AJEQのネットワークは大きく広がり、会員たちの活動は、ケベックで、欧州で、東京で、日本各地で、ますます表現の力を強めているように思います。次の大会で皆さんにお会いできることを楽しみにしています。(加納)



### 日本ケベック学会 (AJEQ)とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は、以下のホームページとブログを ご覧ください。

HP: http://www.ajeqsite.org/index.html プログ:http://ajeq.blog26.fc2.com/

#### 日本ケベック学会(2012年2月~)

. 主要役員

小畑精和(会長)

立花英裕 (副会長)

小倉和子 (副会長)

池内光久(監事)

曽田修司(監事)

C. Y. シャロン(顧問)

· 広報HP担当

加納由起子

小松祐子

安田 敬

宮尾尊弘

AJEQニュースレター

年3回発行

発行人・小畑精和

編集人・加納由起子

日本ケベック学会